

1943年 月刊読売 復刻版

【復刻版刊行概要】

◎ 解題 石川 巧 (立教大学文学部教授)
 ◎ 体裁 B5判・上製・総約8、100頁
 ◎ 推薦 阪本博志 (宮崎公立大学文学部准教授)
 土屋礼子 (早稲田大学政治経済学術院教授)
 坪井秀人 (国際日本文化研究センター教授)
 成田龍一 (日本女子大学人間社会学部教授)
 ◎ 原本提供 (株)読売新聞東京本社 / 石川巧 / 他



※各年版による分売が可能です。 限定70部

回数	配本	内容	巻数	本体価格
第1回	全5巻 本体84,000円 ISBN 978-4-906943-41-8 2014年07月	1943 (昭和18) 年版 ISBN 978-4-906943-42-5	全2巻	36,000円
		1944 (昭和19) 年版 ISBN 978-4-906943-45-6	全2巻	36,000円
		1945 (昭和20) 年版 ISBN 978-4-906943-48-7	全1巻	12,000円
第2回	全4巻 本体72,000円 ISBN 978-4-906943-49-4 2014年12月	1946 (昭和21) 年版 ISBN 978-4-906943-50-0	全2巻	36,000円
		1947 (昭和22) 年版 ISBN 978-4-906943-53-1	全2巻	36,000円
2014年度合計 本体156,000円+税				
第3回	全6巻 本体108,000円 ISBN 978-4-906943-56-2 2015年05月	1948 (昭和23) 年版 ISBN 978-4-906943-57-9	全2巻	36,000円
		1949 (昭和24) 年版 ISBN 978-4-906943-60-9	全4巻	72,000円
第4回	全3巻 本体54,000円 ISBN 978-4-906943-65-4 2015年12月	1950 (昭和25) 年版 ISBN 978-4-906943-65-4	全3巻	54,000円
2015年度合計 本体162,000円+税				
第5回	全5巻 本体90,000円 ISBN 978-4-906943-69-2 2016年05月	1951 (昭和26) 年版 ISBN 978-4-906943-69-2	全5巻	90,000円
第6回	全4巻 本体72,000円 ISBN 978-4-906943-75-3 2016年12月	1952 (昭和27) 年版 ISBN 978-4-906943-75-3	全4巻	72,000円
2016年度合計 本体162,000円+税				

※全27巻揃価格 本体480,000円+税 ※各巻18,000円+税 (1945年版のみ12,000円)

★好評発売中

「月刊読売」

解題・詳細総目次・
執筆者索引 増補改訂版

◎ 解題 石川 巧 (立教大学文学部教授)
 ◎ 定価 本体20,000円+税
 ◎ 体裁 B5判・上製・総386頁
 ◎ 推薦 佐藤卓己 (京都大学大学院教育学研究科教授)
 田村俊作 (慶應義塾大学文学部教授)

▼月刊読売 第5巻第5号 昭和22 (1947) 年5月1日発行

表紙	岩田専太郎 (絵)	表1
広告		表2
目次		(1)
小説	寄談クラブ (第5話)：観音様の類 野村胡堂 (作) / 鈴木朱雀 (絵)	2-7
コント	マンガコント：賢や 店は店屋 / その店屋が / 営業不振 / さて原因は 森比呂志 (画・作)	7
論説	議員、国民に与う——正しい議会政治への道 尾崎行雄	8-10
小説	掌篇小説：子ども 小糸のお	11
評論	新憲法下の日本人 長谷川如是閑	12-14
海外	狗内を売る——上海通信 14	
スポーツ	春の六大学：リーグ戦のホープ 宇野庄治	15
落語	新作落語	

昭和22年

戦争末期から占領期、独立初期へ
歴史・メディア・世相研究の宝庫！

本誌は読み物中心の大衆向け総合雑誌である。
 総力戦体制下では、本土防衛の精神、銃後の心得、学徒動員の様相などを伝え、戦後においては民主主義、女性の社会進出、引揚者と開拓など復興への歩みを映した。戦時から戦後への連続性と非連続性を検証する。

◎ 解題 石川 巧
 ◎ 体裁 B5判・上製・総約8、100頁
 ◎ 推薦 阪本博志・土屋礼子・坪井秀人・成田龍一

1943年5月 1952年7月

月刊読売

復刻版



三人社

三人社

〒606-8316
 京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
 電話 075-762-0368
 FAX 075-762-0369
 振替 00960-1-282564

※図書館様・書店様へ
 小社は少部数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

●表示はすべて税別

敗戦をまたぎ占領期をも照らし出す 基礎資料

坪井秀人（国際日本文化研究センター教授）

敗戦期をまたいで刊行された雑誌を読み込むことは、戦時戦後の連続／非連続の問題を考えるために重要な作業である。敗色濃くなるとともにどの雑誌も時局に敏感に反応し、多くは潜在的に戦時体制の崩壊を予期していたであろう。終戦の詔勅が出た時にはすでに印刷に入ってしまった雑誌の編集側の混乱ぶりなどを垣間見ると、この時期の空気がよくわかる。私はかつて戦時戦後に刊行されたグラビア誌『週刊少国民』の全貌を調査したことがあるが、総力戦プロパガンダを目的として創刊された雑誌は、本土防衛を想定した戦争末期になると敵国との圧倒的な戦力差を読者に学習させる誌面を作り、それが逆説的に敗戦の断絶を乗り切ることを可能にする奇妙な予兆になっているところが興味深い。

一九四三年五月の創刊号で『紙弾』たることを宣言する『月刊読売』も、戦局の悪化とともに同様の道を歩む。とはいえ、この雑誌で興味深いのは親元の新聞社の性格を反映してか、戦後はもちろん戦時下においても時局や世相の隙間から零れるようなゆるい、記事が散見されることである。そのゆるさが時に戦時戦後の境界を渡っていく日本の人々の無頓着なほどにしたたかな自在さを醸し出しているのである。

一九四六年一月の復刊以後の『月刊読売』には、民主主義へのメディア総転向の過程で、風俗世相への急激な傾斜があり、そこには、戦争の影がなおアイロニカルに投影されている。これは戦時から占領期までの言論の風景を見渡すために必須の資料であると言える。

総力戦体制から週刊誌ブームへ

阪本博志（宮崎公立大学人文学部准教授）

一九五〇年代は、雑誌を資料として研究する者にとって、魅力あふれる時代である。

文芸娯楽雑誌として一九四五年に刊行が始まった『平凡』は、一九四八年二月号より大衆娯楽雑誌にリニューアルを遂げ、一九五三年一月号は「百万部突破記念特大号」として発行される。一九五二年創刊のライバル誌『明星』は一九五〇年代に発行部数八十二万部を記録している。

両誌は中卒の若い勤労者を対象としたものであるが、高卒の知的中間層を主要な読者とした『週刊朝日』『サンデー毎日』が一九五四年に相次いで百万部を突破する。そして、一九五六年の『週刊新潮』創刊から、出版社系週刊誌を中心とする、週刊誌ブームが到来する。

これら一九五〇年代の雑誌を把握するとき欠かすことができないのは、戦中との連続性である。また、敗戦後刊行が始まった『平凡』が一九五〇年代前半飛躍的に部数を伸ばしたように、敗戦から復興へとという歴史的背景と雑誌との関係性である。

以上を知ろううえで重要な雑誌が『月刊読売』である。総力戦体制下に創刊された同誌は、時局雑誌『青年読売』を経て一九四六年『月刊読売』として復刊のち一九五一年十一月『旬刊読売』となり、一九五二年七月十三日号から『週刊読売』へと発行形態を変える。

これまで、総力戦体制下から週刊誌ブーム前夜に至る同誌の全貌に迫ることは困難であった。今回の復刊は、それを可能にするものである。この空白が埋められたことを心から喜ぶたい。

全集・単行本に未収録の 作品を多数収録！



- ★月刊読売に掲載された小説で、
全集・単行本に未収録の作品例
- 伊藤整「神と人」
 - 大原富枝「賭けた旗手」
 - 尾崎士郎「戦場親子」
 - 川崎長太郎「ダンサー」
 - 佐藤春夫「日本の母」（連載作品）
 - 芝木好子「第一日」
 - 田中英光「天光教余聞」
 - 長谷川伸「提灯」
 - 林芙美子「郷愁」、「道づれ」
 - 火野葦平「遺骨」
 - 武者小路実篤「不思議」
 - 吉井勇「京洛春吟」
 - 吉川英治「太閤の片鱗」



文豪・左翼作家・流行作家・ 探偵作家など多彩な執筆陣

★主要作家一覧

- | | |
|--------|-------|
| 青野季吉 | 城昌幸 |
| 石垣綾子 | 高木彬光 |
| 宇野千代 | 太宰治 |
| 海野十三 | 田村泰次郎 |
| 江戸川乱歩 | 坪田譲治 |
| 大下宇陀児 | 徳永直 |
| 大庭さち子 | 中村武羅夫 |
| 小川未明 | 丹羽文雄 |
| 大仏次郎 | 土師清二 |
| 海音寺潮五郎 | 林房雄 |
| 上林暁 | 久生十蘭 |
| 木々高太郎 | 平林たい子 |
| 菊田一夫 | 舟橋聖一 |
| 貴司山治 | 正宗白鳥 |
| 北園克衛 | 水谷準 |
| 邦枝完治 | 南川潤 |
| 坂口安吾 | 山田風太郎 |
| 佐々木邦 | 横溝正史 |
| 佐多稲子 | 吉屋信子 |
| 子母澤寛 | |

獣肉の市

【ドキュメンタリ】

昭和26年8月1日号

昭和26年8月1日号
【ドキュメンタリ 獣肉の市】 この号では肉の内臓がどのように流通していくのかという観点から、屠殺、加工、販売のルートを探り、最終的に店で供されるモツ料理や良質な肉の見分け方まで話題を広げている。ここで取材されている食肉の加工・流通という問題は、日本の社会構造を考えるうえでも重要な問題をはらんでおり、現在の視点から読んでも価値のあるドキュメンタリーになっている。

裁かれたる人々

昭和21年2月号

昭和21年2月号
【裁かれる人々】 極東国際軍事裁判(通称・東京裁判)の被告全員の写真と記事が紹介される。

抑留四年

よくぞ還れり

元巨人軍主将 水原茂

昭和24年10月号

昭和24年10月号
【抑留四年よくぞ還れり】 元巨人軍主将水原茂の手記を掲載。

地底の天皇

昭和24年7月1日発行の「炭坑版」のグラビアに掲載された昭和天皇の炭坑視察の模様を伝える貴重な1カット。

アナタハンの真相は

比嘉カズ子氏がデマへの抗議をする。

昭和27年3月1日号

様々な世相を映す

アナタハンの真相は

デマへの抗議に比

【決戦下の恋愛と結婚】 この号では青年男女の恋愛観や生産増強と結婚との関わりなどが語られている。大政翼賛会や大日本婦人会が主導する座談会ゆえ、その内容はいかにも銃後政策的であるが、この時代にあつて「恋愛」という言葉を表題に掲げるだけでも相当の勇断が必要とされたのではないだろうか。

山から山へ

昭和27年3月1日号
【アナタハンの真相ははこうだ】 比嘉カズ子氏がデマへの抗議をする。

彦左はをらぬか

有馬頼寧

戦時随想の1

昭和19年6月号

昭和19年6月号
【彦左はをらぬか】 戦時期に掲載された随想の特徴のひとつは神話化された歴史のなかに「皇国の大義」や国土防衛論を規範にするための根拠を求めるような語り口が頻繁になされていることである。それは必然的に、若者たちのヒロイズムを喚起する仕組みになっており、玉砕=特攻を日本の伝統的な戦法・戦術として正当化することにもつながっている。

決戦下の

吾欣林倉

大東亞戦争従来の戦争と

心を持ち科学を充分に活用

吾欣林倉

昭和20年3月号

決戦下の

座談会

どんな相手を望むか

大森 洪太
 桐原 茂見
 百々 日之助

昭和20年3月号